

呼び名への“さん”づけ“ちゃん”づけ

1 昔は“さん”づけ

私は、大正6年(1917 年)生まれである。こどもの頃には近所の人から「サアちゃん」と呼ばれていた。“ちゃん”づけは、子どもへの愛称であろう。それが大人になっても、今のような年寄りになっても相変わらず「サアちゃん」と呼ばれる。そして、私も、最も身近な親しい人には、孫のある年齢の人なのに〇〇ちゃんとためらわずに呼んでいる。習性となったからだ。

ところで、私の子ども小的时候には、近所のおじさん方を「タカさん」(高衛さん)、「スウさん」(須真雄さん)、「イワさん」(岩夫さん)、「ソウさん」(宗太さん)等と“さん”づけで呼ばれていて、同年輩の方からでも決して“ちゃん”づけで呼ばれることはなかった。だから、“ちゃん”づけは、私の子どもの頃から始まったのではないかと思うのである。

2 そして、親は子と呼び捨て

私の母の名は「美興」であるが、母の実母から「ミイ」と呼ばれていた。私の父は「良一」であるが、その父からは「リョオ」と呼ばれ、父の兄も同じく父親から「イチ」(市次という名だが)と呼び捨てだ。私も、祖父や叔父(母の弟)からは「サアよ」と呼ばれていた。“さん”も“ちゃん”もつかない。しかし、それが当たりまえで、目上の者が目下の者と呼ぶのに敬称をも意味する“さん”づけはおかしいわけだ。(嫁さんは例外で、嫁家先では敬意を表して“さん”づけが普通だが)

私が大人になる頃から自分の子どもでも〇〇ちゃんと呼ぶようになる。子どもも親を「おとうちゃん」「おかあちゃん」と“ちゃん”づけだ。そして、年が寄れば、おじいちゃん・おばあちゃんになる。むかし話では「…おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へせんたくに…」であったが。

3 “ちゃん”づけはいつ頃から

そもそも、〇〇さんと呼ぶ“さん”は人名にそえる敬称の「さま」(様)のくだけた言い方だし、〇〇ちゃんなどと呼ぶ“ちゃん”は、「お坊っちゃん」「お嬢ちゃん」という言い方から転化したものであろう。

島崎藤村の「生ひたちの記」によると、藤村が、明治14年(1881 年)9歳のとき上京して泰明小学校に転入し、そこでの知り合いの友達を「六ちゃん」と呼んでいる。したがって、東京の方ではもうその頃は、“ちゃん”づけの言葉がつかわれていたわけだ。岡山のそれも田舎だったこの地方で、〇〇ちゃんと、子どもの名前を“ちゃん”づけで呼ぶようになったのはずっと遅れてのことだったことがわかる。

4 “ちゃん” づけで(父)親は怖くなくなる

私の子どもの頃の父親はまことに怖い存在であった。それは、一家の柱としての責任が肩にかかっていたし、あらゆる面に気配りが必要で、(私の父などは、娘の衣装の品定めにまで口出ししていた。)それだけに、権威も持っていた。子どもは呼び捨てだしよく叱られもした。父親は、近所の子どもでも遠慮なく叱った。私の父ばかりでない、近所の小父さんも同様で、いたずらをする子ども、言うことを聞かない子どもは、何処の家の子どもであろうと、こっぴどく叱られたものである。(最近では、他家の子どもを叱ろうものなら、反対にその親から抗議を受けるという話をきくが)

私が父親となる時代には、自分の子どもも“ちゃん”づけで呼ぶのが当たり前になっている。平日は家にいないので、子どもは母親任せだから、父親の権威は地に落ちたも同然だ。子どもを叱るチャンスもないから、子どもにとって、父親は只の人にすぎない。近所の子どもは知らぬ間に大きくなっていて、どこの家の子か名前も知らないという情けない有様だ。

最近では、少子時代、子どもは宝となるわけだからますます可愛がられる。子どもは親の付属物ではなく一個の人格をもつもの、成人すると親の思惑は無視されて巣立ってしまう。親は、全く哀れな存在になったというべきか。

5 使われなくなった“やん”づけ

私が小学校へ行っている頃、学校に、吉田嘉平さん(徳島県生まれ)と言う用務員さんがおられた。この村の人は、この人を、陰では「カアやん」と呼ぶわけだ。“やん”づけは、下男・下女を「じいや」「ばあや」「ねえや」と呼ぶ風習の、この「や」が「やん」になまったものであろう。だが、これは、人を見下した言葉であった。(註)いまでは、下男も下女も一般家庭では見られないし、家事手伝いのような方でも、すべて“さん”づけで呼ばれている。地位や身分によって差別してはならないのだから当然であろう。

註 昔は、どんな職種にも階級があり、その地位によって、言葉の使い分けがあったようだ。江戸末期、日本の北辺で活躍した、かの「高田屋嘉兵衛(1769-1827)」も、若いとき、雇われ身分の時期は、「嘉アやん」と言われ、地位があがっても、なお、「嘉兵衛どん」だ。商人として独立し、一家をなしてはじめて、同業者仲間から「さん」づけで呼ばれている。(司馬遼太郎作「菜の花の沖」の記事より)

平成9年7月号 第43号
(中 尾 佐之吉)